

●二人で味わう古典和歌（105）

みなひと  
皆人の心ごころぞ知られける雪踏みわけて訪ふも訪はぬも

飛鳥井雅経

『新統古今和歌集』「釈経」の一首。

飛鳥井雅経は、新古今歌壇の最終ランナーの一人である。

新古今時代をリードした藤原定家や良経が早くから活躍したのに比べ、雅経が歌壇に頭角を現したのは三十歳ごろと思われる。鎌倉にいた雅経（当時二十八歳）を都に呼び寄せたのは後鳥羽院であるが、なんとそれは、蹴鞠の会に参加せよとのこと。

雅経は、蹴鞠の名手であった祖父・頼輔の才能を受け継ぎ、飛鳥井流蹴鞠の創始者として、蹴鞠を愛した二代将軍・頼家に厚遇された。そこで後鳥羽院から声がかかったのである。その後、後鳥羽院の近くで、もともと素養のあった和歌を懸命に学んで歌人としても大活躍した。

つまり蹴鞠と和歌の二刀流。今ならサッカー日本代表のキャプテンであり著名な歌人でもある、そんなスゴイ人だ

つたのだ。定家より八歳年少、後鳥羽院より十歳年長。のちには、和歌を好んだ三代将軍・実朝と都の歌人たちとの橋渡し役も果たすことになった。

さてこの歌。

「どの人の心の程もわかるなあ。雪を踏みわけて訪ねてくれる人も、そうでない人も」。

雪深い自分の家を、訪ねてくれる人もそうでない人もいるが、訪ねてくれる人の思いの深さもそれぞれであるし、訪ねてくれないからといって、その人たちの思いもまた一様ではない。なるほど、そうだなあと思うが、注釈書によれば、仏教の教義を詠んだ「釈経」の歌。五神通（ごしんつう）という不思議な能力のうちの「他心通」（他人の心を見通す力）を詠んだ一首だという。するとなんだか上から目線になっていやだなあ。（たまには注釈書をスルーしてしまおうか。）

ところで、この歌は後鳥羽院が催した和歌行事「正治後度百首」での作。院に認められ、歌人・雅経の第一歩となった歌なのだという。（やはり、注釈書には大事なことが書かれている。）

（小島ゆかり）